二〇一二年十二月五日　開催

神々と幸福の南アジア——ブータンとネパール

ソナム・トブギャル、バル・クリシュナ・アディカリ

（執筆＝今千春）

■講演者……ソナム・トブギャル（ブータン国民総幸福委員会勤務、アジア経済研究所研修生）、バル・クリシュナ・アディカリ（ネパール財務省勤務、アジア経済研究所研修生）

■司会・解説……山形辰史（アジア経済研究所開発スクール事務局長・教授）

■進　行……矢頭典枝

■使用言語……英語

■同時通訳指揮……柴原智幸（本学英米語学科専任講師、グローバル・コミュニケーション研究所副部長）

■同時通訳……小野尾光平、岩井良晃、椿花緒里、奥原来未（以上、本学英米語学科通訳・翻訳課程学生）

本レクチャーでは、アジア経済研究所より司会者および講師を迎え、南アジアの国についてお話いただいた。南アジアは地理的にも民族的にも多様性に富んでおり、今回はその多様性の象徴でもあるブータンとネパールに注目し、国の基本的な知識、国民の生活、そしてかれらがもつ哲学や宗教をとおして、それぞれの国の理解を深めるというテーマであった。

講演に入る前に、本学の酒井邦弥学長より挨拶があった。二〇一二年四月、本学は学科を再編し、新たにアジア言語学科およびイベロアメリカ言語学科が設置された。これを機に、アジア経済研究所とも提携関係し、互恵的な関係を築いていきたいということ、そして今回の講演がその始まりであることが強調され、司会をつとめる山形辰史氏および講師二名が紹介された。

次に、山形氏によってアジア経済研究所についての説明が

なされた。同研究所は正式名称「独立行政法人日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所」といい、本学と同じく千葉県千葉市美浜区に位置する。同研究所には二六〇名のスタッフがおり、そのうち一三〇名は研究員として各自の専門とする地域の研究を行なっている。また、開発専門家の育成を目的とした開発スクールという研究事業も実施しており、現在は日本人研修生九名、外国人研修生一二名が研修を受けている。今回の講師二名はこの外国人研修生として来日しており、二〇一三年三月まで日本に滞在する予定だという。講師の一人は、ブータン出身のソナム・トブギャル氏である。彼はブータンの国民総幸福委員会に勤務しており、国の経済対策に携わっているという。もう一人はネパール出身のバル・クリシュナ・アディカリ氏で、ふだんはＢＫ（ビーケー）氏と呼ばれているそうで、本レクチャーにおいても同様に紹介された。

さらに、今回のレクチャーで取り上げた南アジアについての説明があった。南アジアの中心はインドであるが、この地域は多様性に富んでおり、西はアフガニスタンやパキスタンなどの砂漠の地域、東のバングラデシュのほうは湿っていて、三角州でできているような地域である。南の地域は赤道に近くて暑く、逆に北に行くと雪が降るような地域である。こうした地理的な多様性に加え、民族や宗教においても、さまざまなものが見られる。今回は、南アジアの国々のうち、とくにブータンとネパールを取り上げ、それぞれの国をとおして南アジアへの理解を深めることを目的とした。

ソナム・トブギャル氏（左）と、バル・クリシュナ・アディカリ（ＢＫ）氏（右）

司会・解説の山形辰史先生

“Bhutan and Happiness”

まず、ブータンについてソナム氏の講演があった。講演の前半ではブータンの基本的な情報、後半ではブータンが発展指標として採用している「国民総幸福量」（ＧＮＨ）のコンセプトが紹介された。

基本的な情報では、地理的特徴、人口、政治行政、民族衣装、宗教、国花、国獣、また国のスポーツについて、写真と

ともに説明された。ブータンは非常に小さい国で、北は中国、南はインドという大国に挟まれている。ブータンと日本との関係は一九六七年から続いており、現在まで良好な関係が築かれている。ブータンには国王と王女がおり、政治行政は議会民主主義が採用されている。二〇〇八年には初めての国政選挙が行なわれた。民族衣装は男性は「ゴー」、女性は「キラ」と呼ばれる衣装が日常的に着用されている。宗教は仏教が主であるという。また、国花はブルー・ポピー、国獣はターキン、国のスポーツは弓術で、ブータンのさまざまなところで見られるという。

次に、GNHの成り立ちとその理念、指標が示され、国の政策としての実践、ブータン国民のGNHの実態などが説明された。GNHとは、物理的な幸福と物理的ではない幸福の間にバランスを作り出すためのアプローチである。GNHは一九七二年に前国王によって提唱され、それ以来、国の発展の政策として重視されている。ただし、GNHはGDP（国内総生産）を否定するものではなく、双方とも重要なものとして捉え、そのバランスをとるべきだという考えであることが強調された。GNHには九つの領域があり、そのうち「健康」「教育」「生活水準」「経済的多様性」と「経済活力」はすでに多くの国が基準としている基本的なものであるが、「心理的な幸福」「時間の使い方」「文化の多様性」「地域の活力」はブータンの主権を保護するものであり、熟慮する必要がある。これまでGNHの運営は、基本的に三つのステップによって行なわれてきた。一つめのステップでは、二〇〇七年にGNH委員会が設立され、GNHの中核となった。次に、指標、政策、プロジェクトの選択手段の発展が導かれた。三つめは、GNHに対する進展の評価である。二年に一度、調査が実施され、GNHがよい方向へ向かっているかどうかを評価・分析している。これまで二〇〇八年、二〇一〇年にGNH調査が行なわれ、国民の実態が明らかにされた。この結果はウェブサイトで公開されている。たとえば、時間の使い方に関して言えば、理想的な一日の時間の使い方として「仕事八時間、余暇八時間、睡眠八時間」が設定されているが、二〇一〇年の調査では「仕事七・八時間、余暇七・七時間、睡眠八・五時間」と、睡眠時間がやや多いという結果になっていた。次に国政に目を向けると、これらはGNH-PST（政策スクリーニングツール）をとおして決定されるという。つまり、国のあらゆる政策はGNHのレンズをとおして評価、選別されており、GNHを強化する政策やプロジェクトを採用し、GNHに相反する政策やプロジェクトは撤廃していく。たとえば、ここでは更新すべきエネルギーの発展政策について、GNH-PSTの結果が紹介され、二十六の指標をそれぞれゼロから四までの尺度で評価されていた。このように、

ＧＮＨはブータンの中枢をなしており、国民の生活および国の政策すべてに関わっている。そして、ブータンの国家の経済発展政策は、ＧＤＰではなく、ＧＮＨの価値観が主流となって実施されていく。つまり、ＧＮＨを政策の中心とすることで、ＧＮＨの指標が発展の物差しや進むべき方向のコンパスとなり、資源分配方法や優先すべき政策が選定され、分配資源や政策が個人や地域、そして社会全体に影響を与え、それがまたＧＮＨ指標に反映されていくという循環ができあがり、さらによい方向に向かうのだという。

“Natural Nepal”

ブータンに続き、ネパールについてＢＫ氏の講演があった。まず、ネパールの地理的特徴から始まり、国の基本情報が述べられた。ネパールもブータンと同様、中国とインドという大国に挟まれた小さな国で、一二五の民族が暮らす多民族国家である。それに伴い、言語も一二二の言語が話されている。こうした多民族性から、祭りが一年の日数よりも多く開かれているなどの特徴がある。また、あまり知られていないが、ネパールでは自然の山や花、昆虫、動物等においても多くの種類が生息しており、生物的な面でも多様性に富んでいる。たとえば、世界で最も高い山トップ一〇のうち、八つはネパールにあるのだという。ネパールの宗教は、ヒンズー教、仏教が代表的で多くの遺産ものこされており、世界中に知られている。ただし、政治では政教分離が確立されている。

次に、ネパールを代表する寺院が紹介された。パシュパティナート寺院はカトマンズ東にあるバグマティ川の川岸に位置しており、ヒンズー教寺院のなかで最も重要な寺院の一つとされている。ルンビニは、仏陀の生誕地とされており、ネパールの人々は仏教が不変の幸福のすべてであると信じているという。スワヤンブナート仏塔はカトマンズ渓谷の頂上にあり、モンキー・テンプルとして知られている。ここは仏教寺院であるが、ヒンズー教徒も敬意を表すところである。シュヤンブナート寺院も仏教寺院であり、満月の夜に僧侶が祈りを捧げるところである。

このような寺院に加えて、ユネスコの世界遺産に指定されている古都バクタプールやパタンのダルバール広場や数々の仏教芸術についても紹介された。バクタプールのダルバール広場は旧王宮前にある広場で、ネワール建築の数々を見ることができる。パタンダルバール広場もまた旧王宮前にある広場であり、ネワール建築を見ることができるが、とくにここには一つの石で立てられた寺院が残されているという。また、仏教絵画や仏像、タンカと呼ばれる仏画といった仏教芸術は、ネパールの至るところで目にすることができるという。

また、ネパールの人々についても少し説明された。先にも

述べられたように、ネパールは多民族、多宗教であることが強調され、とくにクマリと呼ばれる少女が存在することが取り上げられた。クマリは、生きた仏とされ、四、五歳の少女が選ばれ、その少女が去ったあとには、また新たな少女がクマリとなるのだという。

最後に、ネパールの自然、観光地、アクティビティなどが詳しく説明されたビデオを視聴した。ここでは、ネパールが自然豊かで文化的多様性もあり、観光としても非常に楽しめる国であることが強調された。パラシュートやバンジージャンプ、ラフティングといった自然のアクティビティやサファリを体験したり、さまざまな祭りも見られたりして、充実した時間を過ごすことができるのだという。

以上で講師二名による講演が終了し、質疑応答の時間が設けられた。質疑応答では、文化の多様性と普遍性、また大国に囲まれた国としての状況など、さまざまな話題で活発な議論が行なわれた。

まずブータンに関する質問として、ブータン観光について取り上げられた。ブータンへの外国人旅行者には二〇〇ドルを支払うことが義務づけられているが、これは交通費やホテル代、食事代が含まれた金額であり、単に大金を支払っているというのは誤解であるという。

また、ネパールに関する質問としては二つ挙がった。一つはネパールの多宗教について、ネパールには多くの民族、宗教、言語があるが、人々は他の人の宗教を尊重しながら共存していることが説明された。もう一つはネパールの王国について、都市によって差があるのはなぜかという質問であった。これに対しBK氏は、それぞれの都市の政治的、経済的な発展性が関連しているのではないかと回答した。

さらに、ブータンおよびネパール両国に対する質問が三つほど挙がった。一つは両国の文化的習慣と日本との違いについてであった。これに対し、ソナム氏は、ブータンの民族衣装について触れ、たしかにブータン人は日常生活で民族衣装を身につけているが、それは公的な場面に即した服装であって、日本で言えばスーツのようなものだという。また日本とブータンにはエチケット面などに類似点が見られ、目上の人を尊重したり、お辞儀をしたりするといった行動はブータンにもあるという。ネパールに関しても、日本との類似点としてホスピタリティが挙げられ、配慮の面では共通性があることが指摘された。また、言語面でも似ている面があるという。もう一つの質問では、社会における女性の地位が取り上げられた。これに関してはいずれも発展途上国として多くの問題が残されていると回答された。その一方で、これから国の発展に伴って法律や公共サービスが整備され、差別は解消して

いくのではないかということも付け加えられた。最後の質問は、中国とインドという大国に挟まれた両国の互助関係についてであった。両国は、インドの影響を受けていることが前提となっているものの、政策や教育等を共有しており、協力関係にあることが述べられた。とくに、両国は南アジア地域協力連合に加盟しており、平和や独立、安全、気候変動についてさまざまなミーティングや集会が頻繁に開催されているのだという。

同時通訳を行なう、英米語学科通訳・翻訳課程の学生たち

質問する、重冨スパポン先生
（本学アジア言語学科）